

第39回 令和7年6月10日(火)

「令和の米騒動について思うこと。」

コメの値段が高止まりしている状況を小泉農相が備蓄米の放出で乗り切ろうとしています。ただ備蓄米も在庫に限りがあるので、そのあと輸入米を入れるのか、新米が出てくるまで待つか、小泉農相の手腕が問われています。

昭和の時代にコメの「減反政策」が実施されました。供給過剰でお米の値段が下がらないように、お米の農家に田んぼを減らせば補助金を出したりした時代もあって、お米の価格と流通量は長年国によって調整されていました。

もっと遡れば戦後GHQによる農地改革で日本は大規模農家(小作人を使って経営する広大な農家)を解体しました。それにより「三ちゃん農業」と言われる農家の家族経営も広まり、さらに農業だけでは食べていけない「兼業農家」も増えていったわけです。

日本はお米にとても気を遣っていて、輸入米についてはかなり高い関税をかけて制限してきました。与党の票田ということもあり長年農家を保護してきたわけです。

さて備蓄米を放出したら短期には解決しますが長期的にはどうなのでしょうか。もし輸入米で乗り切るという政策ならそれはリスクを伴います。

台風で流通がとまるとき簡単にコンビニが空になります。そこからも想像できるように日本の食料自給率は危機的です。有事が起きればすぐに食料は不足します。

そこで学校の探究学習に農業を取り入れるのはどうでしょうか。講師はJAなど農家の方。何を育てるかは自分たちで探究する。土地は廃校となった学校や、部活が盛んではない学校で使用していない場所です。(川和高校は無理ですが、生徒数が減少している学校などは土地がある場合もあります。)

将来農業に興味を持ったり、自分の家で食糧の自給を考えたりすることができるようになるし、探究学習のヒントにもなります。環境にも関心を持てますし、全国でやれば「探究米」という安価なお米が流通できるようになる。面白いと思いますがどうでしょうか。

オイシックスという会社が工場で農作物を作り全国に配給する事業を行っています。人間は食料がないと生きていけませんし、高齢化している日本の農業は5年後、10年後が見通せない状況です。教育が日本の食料自給率の回復にもっと本腰を入れるべきではないでしょうか。